

いの流水俳壇

「当季雑詠」

特選

右左豆撒く園児の声走る

刈谷 志津選

大川 節弥

(評)「豆撒「節分」とは、季節の移り変わる時。立春の前日、その年の夜を指す。主として邪道災厄を防ぐため豆撒きや門に柵を挿す行事。翌日は立春で春が来る。揚句は保育園での豆撒きを作句。園児たちは園庭に出て「鬼は外福は内」と大声をあげて豆を撒く。そこに赤鬼青鬼が現れると鬼に向かって豆を打つ「声走る」。大きくて力強く可愛らしい声を園内外に響かせながら走る。この園児たちもやがて成長し、社会の鬼と出会う日もあるやも。しかし豆撒きの日思い出し、皆で協力して鬼を払い立派な社会人となり、この町とこの国の未来を背負って行く事を願ってやまない。

誰彼を偲ぶ蒲団に足を伸べ

片岡 包女

(評)揚句の「蒲団」は、おそらく電気炬燵蒲団ではないかと思う。冬の暖房としてはもちろん、寛ぎの憩いの場所として、また読み書きテレビ観賞、食卓代わりとして重宝に使われている。「誰彼を偲ぶ」この炬燵で出会った人達。今は遠く離れている人、過ぎ去った人のこと等を温かく包んだ「蒲団」に足を入れ、伸ばしながら懐かしい思い出に浸る。こうした時間も幸せな余世の一つ。作者の長くて立派な俳歴を物語るような平明で余韻の残る句。

数人のまだ残りおり野火の跡

竹崎たかひろ

(評)新芽の発育と成長を助けるため、春先の風のない晴天の日を選んで枯草を焼き払い、害虫を駆除することを「野焼き」と言い、その火を「野火」と言う。一目散に走る野火、人々は遠巻きにして火の行方を見守る。強風に備えて消防車も待機。春への季節を感じる風物詩の一つで、鎮火しても「残り火」の万一に備えて数人が警戒にあたる。火災に対する慎重さが伝わり見える一句。

入選

一画の田の黒々と農始め

川村 博子

(評)「二画」二区切りの田んぼが鋤き起こされ、土がつかやと黒く光って見える。昔は鋤始め、農始めとして行事があった。今はなくなり、早々と鋤かれた一つの田の新しい土に春の息吹を感じ農始めと詠んだ。春はすぐそこ、忙しい農作業の始まりである。

珈琲の香に目覚めるや春來たる

國田 貞子

(評)コーヒーは老いも若きも日常欠かせない愛用の飲み物となり、その芳潤な香り、特に空気の澄んだ朝の香りは格別である。寝室まで届いた香りに目覚め、春の訪れを感じ、うきうきとした朝の目覚めである。

ばらばらと田舎の畑に降る霰

石原 静

(評)畑に降る霰を昔は霰あられも含めて「雪あられ」と呼んだ。丹精こめて作った野菜畑に、特に煙草の葉に穴をあけ被害は甚大である。せめて畑には降らないでと願う。(田舎の畑)の表現で新鮮な一句に仕上がった。

一句抄

大寒や磁力の失せし繩のれん 岡村 嘉夫
 枯葉には枯葉のぬくみ礼所寺 東谷 晴男
 臘梅をたんと母の忌修しけり 植田 紀子
 春愁や耐えねばならぬこと多し 小野川町子
 神殿の神新たに春の宮 森岡 照月
 牡蠣飯屋路地裏に見る四十年 渡辺ゆかり
 雪虫を見る事もなく八十二 田蔦てい子
 北風に躍りてズボン乾きゆく 平野 洋子
 馥郁と亡友の面影水仙花 刈谷 志津

次題「当季雑詠」

締切/毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町170011

893-1922

有料広告

やまおか眼科

院長 山岡 昭宏

いの町新町20-1

TEL (088) 893-5161

■日帰り白内障手術

■OCT(光干渉断層計)

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 9:00~12:30	○	○	○	○ 13:00 まで	○	○
午後 2:00~5:30	○	手術	○	△	○	▲

▲第2、4土曜日 午後1:30~4:00

▲第1、3、5土曜日 午後休診

休診/木曜午後 日曜祝日